福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

日英語の身体部位語彙:「アタマ」と“head"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 皆島, 博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/582

日英語の身体部位語彙：「アタマ」と“head”

皆　島　　博

（2006年8月30日受付）

1. はじめに

小論は日英語の身体部位語彙（body-part term）について，日英対照言語学的見地から考察する。日本語の「アタマ」と英語の“head”は，基本的な指示範囲として【身体部位】[1] というカテゴリーを共有しており，しかも両者ともに多義性（polysemy）[2] を備えた語彙である。

(1)　a. アタマが痛い　　b. My head aches.
　　c. 釘のアタマ　　d. the head of a nail
　　e. 行列のアタマ　　f. the head of the line
　　g. アタマを使いなさい　　h. Use your head.

身体部位語彙のように，基礎的な語彙ほど多義である傾向が強いといわれるが，この多義性，すなわち本義（最も基本的な意味）から転義（本義から拡張した意味）への意味拡張（意味の転移）を引き起こす一般的な要因として，「メタファー（隠喩）」および「メトニミー（換喩）」の２大原理が主要な役割を果たしているということは従来指摘されてきたとおりである（Ullmann 1962；池上 1996；村田 2005）[3]。

小論では，日英語の身体部位を表す語彙である「アタマ」と“head”の語義とその多義性に関して：

①意味拡張のパターンの分類
②意味拡張の方向性における類似点と相違点

以上の２点について明らかにしていくことを目的とする。

2．日本語の「アタマ」

2.1.【身体部位】としての「アタマ」の本義

日本語の身体部位語彙「アタマ」の基本的な指示範囲は，人間の身体のうちで最も上位の部分であり，狭義では顔より上の部分，特に毛髪が生えている部分を指すが，広義では首から上の目・口・鼻・耳（や脳）を含む部分を指すこともある。

(2)　a.　アタマをなでる（狭義）
　　b.　照れてアタマをかく（狭義）
　　c.　あの役者はアタマがでかい（広義）
　　d.　子供がいやいやをしてアタマを振る（広義）

日本語の「アタマ」は，どちらかと言えば，首から上の頭部全体というよりもむしろ，顔から上の部分，すなわち，通常頭髪が生えている部分を指すことが多いように思われる。しかしながら，上の例のように，広義で用いられることも少なくないと考えられる。したがって，意味拡張の起点として，【頭頂部】（および【頭部全体】）というカテゴリー[4]を仮定しておくのが妥当であろう。

2.2.【頭頂部】から【物体】へ

日本語の「アタマ」は形状や位置の類似性に基づくメタファーによって，その基本的指示範囲が【頭頂部】から，身体部分以外のさまざまな【物体】に対してもずれることがある。

(3)　a.　釘のアタマ
　　b.　山のアタマに月が出る

これらの例のように，「アタマ」が【物体】というカテゴリーに対して適用された場合，「アタマ」に含まれる意味は，物体の〈上部〉[5]ということになるであろう。この〈上部〉という意味は，物体の垂直方向における上端部分ということになるが，次の例のように，「アタマ」は水平方向における先端部分を指すこともある。

(4)　a.　飛行機がアタマ（＝機首）を上げる
　　b.　船のアタマ（＝船首）を目的地に向ける

これらの例のように，【物体】の先端部分を指す場合，「アタマ」に含まれる意味は，【物体】の〈前部〉ということになるであろう。また，この〈前部〉という意味における「アタマ」は，厳密

に言えば，【物体】ではないが，複数の人間が並んで作った列に対しても用いられることがある。

(5) a. 行列のアタマ
b. パレードのアタマ

これらの例では，行列を細長い【物体】に見立ててその先頭，すなわち先端を「アタマ」と呼んでいるわけであるが，行列の〈前部〉という意味[6]は，「仲間内で先頭に立つ人」「主だった人物」などのイメージとも結びついていくように思われる。

(6) a. オレオレ詐欺集団のアタマが逮捕された
b. ベテランをプロジェクトチームのアタマに据える

これらの例のように，人の集団の「先頭」を指す場合には，「アタマ」は〈中心人物〉〈指導者〉といった意味において用いられているといえる。

2.3.【物体】から【時間】へ

日本語の「アタマ」が【物体】について適用される場合は，〈上部〉〈前部〉などへ意味拡張していくことはすでに見たが，次のような例はどうであろうか。

(7) レンタルした洋画ビデオのアタマの予告編を飛ばして見る

この例では，物理的なビデオテープの上に記録された映像や音声信号の「最初の部分」を指しているとも考えられるし，ビデオテープを再生した際に冒頭で出てくる（時間的に）「始めの部分」を指しているともいえる。このように，「アタマ」の指示範囲は【物体】から【時間】へと及ぶ[7]こともある。次のような例では，「アタマ」は時間的な流れを【物体】に見立てて，その〈先頭〉〈前部〉といった意味において用いられている。

(7) a. アタマ金
b. 話のアタマ
c. 八月のアタマ

これらの例のように，【時間】に対して「アタマ」が適用された場合，「アタマ」は〈最初〉〈初期〉[8]といった意味において用いられているといえるであろう。別の見方をすれば，「アタマ」の【身体部位】としての具象的な意味合いは薄れ，純粋に時間の流れにおける順序関係を指す文法形式として用いられているのである。すなわち，意味の漂白（semantic bleaching）のプロセ

スを経て，文法化（grammaticalization）された要素になったわけである。

2.4.【時間】から【様態】へ

「アタマ」が【時間】というカテゴリーに適用された場合，〈最初〉〈初期〉などへと意味拡張していくことはすでに見たが，次のような例はどうであろうか。

(9)　a.　アタマからけちをつける
　　b.　犯行グループの要求をアタマからはねつけた
　　c.　アタマから犯人扱いされ実に不愉快な思いをした

これらの例は，「アタマから」という定型表現において副詞的な意味合いで用いられるのが普通で，何らかの出来事や行為の時間軸の上での〈最初〉〈初期〉を表しているとも解釈できる。しかし，同時に最初から物事を決めてかかるさまを描写しているところから「迷いがない」「確固とした」「にべもなく」といったニュアンスも醸し出している。

(10)　a.　首相は内外の批判などアタマから問題にしていない
　　b.　新聞に書いてあることをアタマから信用するのは危険だ

これらの例における「アタマ」は，〈最初〉という意味で用いられているといえるが，それと同時に物事の【様態】の描写という観点からは，〈完全〉〈徹底〉[9]といった意味においても用いられているといえるであろう。

2.5.【頭頂部】から【頭髪】へ

【身体部位】としての「アタマ」は，次の例のように，狭義では「頭髪が生えている部分」，すなわち【頭頂部】を指していることはすでに述べたとおりである。

(11)　a.　アタマを掻く
　　b.　子供のアタマをなでる

これらの例における「アタマ」は，【頭頂部】というカテゴリーに適用されているが，何らかの近接性に基づくメトニミーによって，さらに指示範囲のカテゴリーがさまざまな部分にずれていくように思われる。

(12)　a.　アタマにポマードをぬる

b. シャンプーでアタマを洗う

これらの例では，位置関係が【頭頂部】と近い【頭髪】へ指示範囲がずれたといえる。さらに，次の例のように，【頭髪】から〈髪型〉への意味拡張が見られることもある。

(13) a. アタマを七三に分ける
b. 今日のアタマはとても決まってますね

また，次のような例では，さらに〈髪型〉から〈髪色〉への意味拡張が見られる。

(14) a. アタマが白くなる（＝白髪）
b. 派手な色のアタマをした若者

以上をまとめると，日本語の「アタマ」の指示範囲が【頭頂部】から，それと位置的に近接している【頭髪】というカテゴリーへずれた場合，そこから〈髪形〉〈髪色〉へと，ここでもまた近接性に基づいた意味拡張[10] が見られるということになる。

2.6.【頭頂部】から【頭脳】へ

日本語の「アタマ」はその内容物である「脳みそ」に対して適用されることもある。「アタマ」を容器に喩えれば，その中身は「脳みそ」であり，このような「アタマ」から「脳みそ」へ指示範囲のずれも「容器⇔中身」の関係に基づくメトニミーによるものである。

(15) アタマが痛い

この例は，文字通りには，「頭痛がする」，すなわち，「頭の中身が痛い」という意味で用いられ，特に頭の表面の部分が痛む状況を表しているのではない。つまり，「アタマ」の指示範囲がその内容物である【頭脳】にずれたわけであり，ここから，次の例のように，【頭脳】の働きや機能，すなわち〈知性〉〈思考力〉などへの意味拡張が生じたのであろう。

(16) a. 彼女はアタマが良い
b. もっとアタマを使いなさい

また，〈知性〉や〈思考力〉のような意味は，次の例にあるような「融通のきかないこと・人」を描写する表現で用いられる場合，〈考え方〉〈思考様式〉などへの意味拡張も見られるように思

われる。

(17)　a.　親父はアタマが古い
　　b.　アタマがかたい部内の長老たち

最後に，〈考え方〉〈思考様式〉といった意味は，人間の「こころ」や「気持ち」などのイメージとも自然に結び付き，そこから，次の例のように，〈心情〉〈気分〉などへの意味拡張も生じたのであろうと思われる。

(18)　a.　将来の進路であれこれアタマを悩ます
　　b.　ローンの支払いを考えるとアタマが重い

2.7.【頭頂部】から【人間】へ

日本語の「アタマ」の最も基本的な指示範囲として，人間の身体の一部分，すなわち【頭頂部】（および【頭部全体】）を仮定したが，その指示範囲が広がって，次の例のように，「人間全体」[11]を指すようにもなることがある。

(19)　a.　懇親会費として一人アタマ五千円を徴収します
　　b.　草野球をするのにアタマ数を揃えなければならない

これらの例では，「アタマ」の指示範囲が【人間】というカテゴリーへとずれており，そこから〈個人〉〈人数〉といった意味拡張が生じていると考えられる。

3. 英語の“head”

3.1.【身体部位】としての“head”の本義

英語の身体部位語彙“head”の基本的な指示範囲は，人間の身体のうちで最も上位の部分で，首から上の目・口・鼻・耳（や脳）を含む部分を指し，日本語「アタマ」の広義での指示範囲である【頭部全体】のカテゴリーに近いといえる。

(20)　a.　She stuck her head out of the window.「彼女は窓から顔を突き出した」
　　b.　He is a head taller than I am.「彼は頭一つ僕より背が高い」

日本語の「アタマ」は【身体部位】としては，原則として【頭頂部】（場合によっては【頭部全体】）指すことが多いが，英語の“head”の場合は，原則として「首から上のかしらの部分」，

すなわち【頭部全体】という意味だけで用いられることが多いように思われる。

3.2.【頭部全体】から【物体】へ

英語の“head”は形状や位置の類似性に基づくメタファーによって，指示範囲がさまざまな【物体】に対してずれていくことがある。次の例では，形状の類似性に基づいた意味拡張が生じている。

(21) a. flower head「頭状花」
b. a head of lettuce/cauliflower「レタス／カリフラワー一玉」

これらの例は，形状の類似に基づくメタファーによる意味拡張であるが，英語の“head”は次の例のように，位置（および形状）の類似性に基づくメタファーによる意味拡張が（日本語の「アタマ」における【物体】への意味拡張のケースよりも）豊富であるように思われる。

(22) a. the head of a nail/hammer「釘／金槌の頭」
b. the head of a mountain/hill「山／丘の頂上」
c. the head of a boil「瘤（こぶ）の頭」
d. the head of a glass of beer「コップのビールの泡」
e. the head of the page/list「ページ／リストの上部（見出し）」

これらの例における“head”は【物体】の〈上部〉という意味において用いられていることは明らかであるが，次のような例はどうであろうか。

(23) a. the head of a lake「湖頭；河水の流入する側」
b. the head of the Nile「ナイル川の水源」
c. the head of the bay「湾頭；湾の奥」

これらの例では，【物体】のカテゴリーに含まれる〈上部〉という意味が空間的に〈上方〉にずれ，さらに〈奥部〉へと意味拡張していったのではないかと考えられる。また，〈上部〉〈上方〉という意味は次のような例においても現れる。

(23) to sit at the head of the table「テーブルの上座につく」

この例では，“head”が指しているのは空間的に〈上方〉を占めている場所といえるが，ここ

から〈最も重要な位置〉[12] という意味も生じてきたと考えられ，さらに次の例のように，〈重要な位置を占める人〉への意味拡張も見られる。

(25)　a.　the head of a state「国家元首」
　　b.　the head of a school「校長」

これらの例における“head”は「（何らかの組織・団体・集合体などで）最高位にある人物」を指しており，〈指導者〉〈中心人物〉という意味において用いられているといえる。

英語の“head”は【物体】というカテゴリーに適用された場合，〈上部〉という意味において用いられるということはすでに見たが，次のような例においては，【物体】の何らかの意味で水平方向に突き出している「先端部分」を表していると考えられる。

(26)　a.　the head of a bed「ベッドの頭（枕の部分）」
　　b.　the head of a ship「船首」
　　c.　Diamond Head「ダイアモンドヘッド岬」

これらの例は，【物体】の〈前部〉[13] という意味において用いられているといえるが，次のような例はどうであろうか。

(27)　a.　the head of a parade/procession「パレード／行進の先頭」
　　b.　move to the head of the line「行列の先頭に移動する」
　　c.　They were at the head of the attack.「彼らは攻撃の最前線にいた」

これらの例は，厳密に言えば，【物体】への適用ではないかもしれないが，行列などのように人が作った列を細長い【物体】に喩えていると考えれば，その先端部分を〈前部〉〈最前線〉などの意味において用いることは自然な意味拡張であると思われる。

3.3.【頭部全体】から【頭髪】へ

英語の“head”の意味拡張の起点として，【頭部全体】というカテゴリーを仮定したが，この【頭部全体】というカテゴリーにメトニミーの原理が働くと，次の例のように，【頭髪】への指示範囲のずれが生じる。

(28)　a.　close-cropped head「短く刈った頭（＝髪）」
　　b.　to shave one's head「髪の毛を剃る」
　　c.　to wash one's head「頭（＝髪）を洗う」

d. to comb one's head「髪に櫛をいれる」

これらの例のような【頭部全体】から【頭髪】への指示範囲のずれは，さらにメトニミーによって，次の例のように〈髪色〉にまで意味拡張する。

(29) a. gray head「白髪（しらが）頭」
b. red head「赤毛（の人）」

なお，日本語の「アタマ」の指示範囲が【身体部位】から【頭髪】にずれた場合，〈髪色〉に加えて〈髪型〉という意味においても用いられることはすでに指摘したとおりであるが，英語の“head”には，筆者の知る限りでは，〈髪型〉への意味拡張はないように思われる。

3.4.【頭部全体】から【頭脳】へ

英語の“head”の【頭部全体】というカテゴリーは，日本語の「アタマ」における意味拡張と同様に，メトニミーの原理に基づいて「脳みそ」に対しても指示範囲がずれる。

(30) a. My head aches.[14]「頭が痛い」
b. I've got a heavy head.「頭が重い」

これらの例は，「頭痛がする」，すなわち，「頭の中身が痛い」という意味で，“head”の指示範囲がその内容物である【頭脳】にずれたわけである。

さらに英語の“head”が【頭脳】というカテゴリーに対して適用された場合，それは【頭脳】の働きや機能といったイメージとも結びつけられ，そこから〈知性〉や〈思考力〉などへの意味拡張が生じている。

(31) a. Use your head.「頭を使いなさい（＝よく考えなさい）」
b. She has a good head for mathematics.「彼女には数学の才能がある」
c. There are a lot of good heads in the university.[15]「その大学にはよい頭（＝知能の高い人が大勢いる」

これらの例における〈知性〉や〈思考力〉などの意味は，やはり【頭脳】の主要な働きや機能の中の一つである人間の〈心情〉や〈気分〉などへも意味拡張していくように思われる。

(32) a. to take it into one's head「あることをしようと心に決める」

b.　I couldn't get her words out of my head.「彼女の言葉が頭から離れなかった」

なお，日本語の「アタマ」では見られた〈考え方〉〈思考様式〉への意味拡張は，英語の“head”においては，筆者が知る限り，見られないように思われる。

以上ここまで英語の“head”の指示範囲がメトニミーの原理に基づいて【身体部位】から【頭脳】へずれたことにより〈知性〉〈思考力〉〈心情〉〈気分〉などへの意味拡張が生じたことを見てきたが，この意味拡張のパターンは日本語の「アタマ」における意味拡張のパターンとおおむね類似しているといえるであろう。

3.5.【頭部全体】から【人間】へ

英語の“head”は，「部分で全体を表す（あるいは，全体で部分を表す）」というメトニミーの原理に基づいて，次の例のように，「部分」である【身体部位】から「全体」である【人間】へと指示範囲がずれることがある。

(33)　a.　to do a head count (=to count heads)「人数を数える」
　　b.　a dinner at $20 a head「一人当たり20ドルのディナー」

これらの例では，“head”の指示範囲が「人間全体」へとずれて，そこから〈個人〉〈人間〉などへの意味拡張が生じている。なお，“head”は「動物の頭部」をも指すことから，次の例のように，〈頭数〉という意味においても用いることができる。

(34)　a.　100 head of cattle「100頭の牛」
　　b.　to do a head count「頭数を数える」(=33a)

3.6.【人間】から【生命】へ

英語の“head”が【人間】というカテゴリーに対して適用され，そこから〈個人〉〈人数〉といった意味が生じたことはすでに見たとおりであるが，次のような例では，【人間】としての〈個人〉とは切っても切れない関係にある【生命】へと指示範囲がずれている。

(35)　The mistake cost him his head.「そのミスが原因で彼は命をなくした」

この場合は，“head”が【人間】の〈いのち〉という意味において用いられている。なお，日本語の「アタマ」には〈いのち〉への意味拡張は見られないように思われる[16]。

4. まとめ

小論では，日英語の身体部位を表す語彙「アタマ」と“head”について，おのおのの語彙の本義から転義への意味拡張のパターンを見てきたが，ここでその意味拡張の引き金となる語彙の指示範囲のカテゴリーの「ずれ」のおおまかなプロセスを以下に図示する。

図 1. 日本語の「アタマ」の指示範囲のカテゴリーのずれ

【物体】⇒【時間】⇒【様態】
⇗
【頭頂部】⟹【頭髪】
【身体部位】「アタマ」⇒ ⇕
【頭部全体】
⇓ ⇘
【頭脳】 【人間】

図 2. 英語の“head”の指示範囲のカテゴリーのずれ

【物体】
⇗
【身体部位】“head”⇒【頭部全体】⇒【頭髪】
⇓ ⇘
【頭脳】 【人間】⇒【生命】

ここまでの分析で明らかになったことは，【身体部位】というカテゴリーとしての基本的な指示範囲が日本語と英語とでは異なるのにもかかわらず，意味拡張のパターンに一定の共通性が見られるということである。すなわち，メタファーに基づいた【物体】への意味拡張とメトニミーに基づいた【頭髪】【頭脳】【人間】への意味拡張が日英語両者において観察されるということである。

これに対して，日本語だけにしか観察されなかった意味拡張は，メタファーに基づく【物体】⇒【時間】⇒【様態】という文法化のプロセスを経るパターンで，こちらの意味拡張の方向性においては，日本語の「アタマ」の方が英語の“head”よりも転義の抽象化の程度が高いといえよう。また，英語だけにしか観察されなかった意味拡張としては，(【頭部全体】⇒)【人間】⇒【生命】という方向性におけるものがあるが，これはメトニミーに基づくものである。なお，【物体】への意味拡張は日英語共通のものであるが，具体的な適用範囲の広さについて見れば，英語の方に軍配が上がるように思われる。

最後に，小論では原則として考察の対象からは除外した「アタマ」と“head”を含む日英語のイディオム（慣用表現）について若干の指摘をしておきたい。日英語両者ともに「アタマ」と“head”を含むイディオムが非常に豊富であり，大きく次のような2つのタイプ[17]に分けることができる。

一つは，例えば，「アタマの先からつま先まで」（すっかり，完璧に）*vs.*“from head to foot”（全身，完全に），「アタマ越しに」（人の頭越しに何かをする，中間にいる者の立場を無視して，直接相手に働きかける）*vs.*“over someone's head”（人の頭越しに，人を差し置いて），「アタマが弱い」（頭が悪い，愚かな）*vs.*“weak in the head”（頭が弱い，愚かな）などのように表現形式がパラレルな相似形を示し，かつ，意味的にも類似性を示すものである。

もう一つは，例えば，「アタマに来る」（憤慨する，正気でなくなる）*vs.*“to come to a head”[18]（頂点に達する，危機的事態に陥る），「アタマをかく」（照れ隠しをする）*vs.*“to scratch one's head”（途方にくれる），「アタマ（の中）に入れる」（覚えておく，考慮する）vs.“to put something into one's head”（ある考えを人に吹き込む）などのように表現形式がパラレルな相似形を示していながらも，意味的には必ずしも類似性を示さないものである。

このような日英両語のイディオムの表現形式と意味における類似性と非・類似性を成立させているさまざまな要因については稿を改めて論じることにしたい。

【註】

1）厳密に言えば，身体部位語彙としての「アタマ」と“head”は各々の指示範囲（意味領域）が少々ずれている。安藤（1986: 34）によれば，下の図のように，英語の“head”は“face”をその中に含むが，日本語の「頭」と「顔」は互いに別の部分を指示する。このことについては，服部（1968: 235），國廣（1981: 40）などにも同様の指摘がある。

図

<table>
<tr><td colspan="2">head</td><td>頭</td></tr>
<tr><td></td><td>face</td><td>顔</td></tr>
</table>

2）The case of a single word having two or more related senses.（Matthews 1997: 285）

3）「語義（sense）の転用（transfer）は，意味の類似性，すなわち，隠喩（metaphor），および，意味の近接性，すなわち，換喩（metonymy）に基づいて生じる」（Ullmann 1962），「原義と転義との間には普通何らかの連想関係があり，連想関係は類似性（similarity）と近接性（contiguity）に基づいていることが多い」（池上 1996），「転義は第１にメタファー的な発想から起こっているようである。これが半数以上になろう。残りの転義はメトニミー的な関係と考えてよいであろう」（村田 2005）

4）各語彙の指示範囲のカテゴリーを【…】で囲み，そのカテゴリーに含まれる語義（語彙の意味）を〈…〉で囲んで表すことにする。

5）「アタマ打ち」のようなイディオムの表現では，〈上部〉という意味がさらに（何らかの状況における）〈頂点〉〈限界〉といった抽象的な意味へと転義している。

6) 人間の集団や組織をピラミッドに喩えて，その上層部に位置する「長」というイメージから〈最高責任者〉〈上に立つ人〉という意味が出てきたという解釈も可能であろう。

7) Heine & Hünemeyer（1991）では，アフリカ諸語の分析に基づき，メタファーによる意味拡張に見られる傾向性が提案してあるが，OBJECT-to-SPACE（物体から空間へ），SPACE-to-TIME（空間から時間へ）のように，日本語の「アタマ」の意味拡張のパターンにも部分的に一致する傾向性が示してある。

8) 「アタマごなし」というイディオムの表現があるが，これは「相手の言い分を聞こうともせず，初めから一方的に押さえつけるような態度を取る」といった意味で用いられており，やはり「最初から」「始めから」というニュアンスを含んでいる。

9) 特に，下に「アタマから～（し）ない」などの打消し語を伴う場合，「てんで」「まったく」「てんから」というニュアンスが強まるように思われる。

10) 査読者より(13)(14)の例は，「髪型」「髪色」への意味拡張ととらえるべきではなく，意味は「頭髪」のままではないか，という指摘をいただいた。ご指摘の通り，これらの例における「アタマ」の指示範囲は【頭髪】というカテゴリーを共有しており，そこを起点として，各例文のコンテクストや連語関係に応じて，〈髪型〉あるいは〈髪色〉という語義が生じてきた，ということである。

11) 換喩の中でも，「部分⇔全体」の関係に基づく比喩を特に「提喩」(synecdoche）と呼ぶ。

12) さらに〈最も重要な位置〉という意味の抽象度が高くなると，文法用語における“the head（of the noun phrase)”〈(名詞句の）主要部〉のような意味も出てくる。

13)「頭」を意味する語が〈上部〉〈前部〉などへ意味拡張していくプロセスは日本語や英語以外の諸言語にもしばしば見られることが指摘されている（Svorou 1993; Heine 1997; Heine & Kuteva 2002)。

14) イギリス英語（口語）では，「頭痛がする」の意味で“to get a head”という表現があるが，この場合，“head”自体に〈頭痛〉という意味があることになる。

15)「『部分が全体を代表する』換喩の例で言えば，全体を代表できる部分はたくさんある。そのたくさんある部分の中からどの部分を選ぶかで，全体のどの側面にわれわれの注意が集中されているかが決まるわけである。プロジェクトのためにいくつか“good heads”〈よい頭〉が必要だと言った場合，“good heads”を用いて“intelligent people”〈知能の高い人〉のことを指している。ここで肝腎な点は，部分（頭）を使って（人）を表わしているということよりも，むしろその人のもつ多くの特徴の中から，『頭』に関連したひとつの特定の特徴，すなわち『知能』をとりあげているということだ」(Lakoff & Mark 1980: 54)。

16)「頭」という語は含まれないが，日本語では「首をかける」というイディオムの表現に類似の発想が見られる。

17) どちらかのタイプにきちんと収まるわけではないが，「石アタマ」（頑固で融通が利かないこと・人）*vs.*“to have rocks in one's head”（頭の中に岩がある⇒愚かな，分別がないこと）のように表現形式において必ずしも相似形は示さないが，発想において，ある種の共通性が垣間見られ，しかも意味的には類似性を示すイディオムもある。

18) 英語には“to go to one's head”（頭に行く）というイディオムの表現もあるが，これは「酒がまわる，酒に酔う」という意味で用いられる。

【参照文献】

安藤貞雄（1986)『英語の論理・日本語の論理：対照言語学的研究』大修館書店

服部四郎（1968)『英語基礎語彙の研究』三省堂

Heine, B., U. Claudi, & F. Hünnemeyer（1991）*Grammaticalization*. Chicago: The University of Chicago Press.

Heine, B.（1997）*Cognitive Foundations of Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Heine, B. & T. Kuteva（2002）*World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
池上嘉彦（1996）『英語の意味』（テイクオフ英語学シリーズ3）大修館書店
國廣哲彌（1981）『意味と語彙』（日英語比較講座第3巻）大修館書店
Lakoff, G. & M. Johnson（1980）*Metaphors We Live by*. Chicago: University of Chicago Press.（G・レイコフ，M・ジョンソン（1986）『レトリックと人生』大修館書店，渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸・訳）
Matthews, P.H.（1997）*Oxford Concise Dictionary of Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
村田年（2005）「コロケーションによる語の意味の分析と記述：日英語比較の観点から」『日英語の比較：発想・背景・文化』，59-66，三修社
Svorou, S.（1993）*The Grammar of Space*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
Ullmann, S.（1962）*Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*. Oxford: Basil Blackwell.

【参考辞典】

1）国語辞典
『大辞林』（三省堂，1993）
『ハイブリッド新辞林』（三省堂，1998）
『広辞苑』（岩波書店，2000）
『明鏡国語辞典』（大修館書店，2003）
『新明解国語辞典』（三省堂，1997）
『新選国語辞典』（小学館，1978）

2）英和辞典
『アドバンストフェイバリット英和辞典』（東京書籍，2002）
『英和中辞典』（小学館，1986）
『ジーニアス英和辞典』（大修館書店，1988）
『グローバル英和辞典』（三省堂，1983）
『ライトハウス英和辞典』（研究社，1988）
『新クラウン英和辞典』（三省堂，1979）
『新英和中辞典』（研究社，1998）
『新英和大辞典』（研究社，2002）
『ウィズダム英和辞典』（三省堂，2003）

3）英英辞典
Cambridge Dictionary of American English（Cambridge University Press, 2000）
Oxford Advanced Learner's Dictionary（Oxford University Press, 1989）
Random House Webster's Unabridged Dictionary（Random House, 2001）
The Concise Oxford Dictionary（Clarendon Press, 1990）
Webster's New World Dictionary（Simon & Schuster, 1988）
Webster's Third New International Dictionary（Merriam-Webster, 1993）